

<学会記事>8. 骨格性反対咬合症における上顎前方牽引術後変化について(第8回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	阿部 泰志, 遠藤 康子, 浅野 央男, 三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	5
号	1
ページ	56-56
発行年	1986-06-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/31214

術前に計画した位置へ上下顎を移動し、良好な結果を得た。

症例2：受け口を主訴として受診した18歳の女性。頭部X線規格写真の分析で、上顎を前方へ5mm、下顎前歯部を後方へ7mm移動し、さらに、下顔面高を5mm切除するとともに、pog.を4.5mm前方移動する必要があると診断された。そこで、Le Fort I型骨切り術と両側下顎枝矢状分割術、さらに、頤形成術を施行し、術前に診断された如く上下顎を移動することで、良好な結果を得た。

8. 骨格性反対咬合症における上顎前方牽引術後変化について

阿部泰志，遠藤康子，浅野央男
三谷英夫（歯科矯正）

中顔面，上顎部が後方位にある骨格性反対咬合症の治療における上顎前方牽引装置（以下M.P.A.と略す）の効果に関する報告は多いが，術後の変化についての臨床的な報告はほとんどない。今回は低年齢期（Hellmanのdental age IIA～IIIA）にM.P.A.を適用した6症例につき，術中及び術後2，3年にわたる上顎骨の変化についての検討を行なった。

資料として，本学歯学部附属病院矯正科を受診し，骨格性反対咬合と診断され，M.P.A.による治療を6歳前から約1年間受けた女子6症例，及び対照群としてほぼ同年齢の反対咬合の女子15症例の4年間にわたる側面頭部X線規格写真を用い，主に上顎骨における変化を観察した結果，次のような知見を得た。

1. M.P.A.の適用により，上顎骨は前下方へ，特に対照群と比較して著明な前方への変化がみられた。また維持歯となった上顎第2乳臼歯には顕著な近心移動が観察された。

2. 術後1年間では，上顎第2乳臼歯は遠心方向への後戻り変化を示し，その後は再び近心移動を示した。

3. 上顎骨は術後1年間では，reboundと思われる下方あるいは後下方への成長変化を示した。更に術後2，3年では，再び前下方へ成長変化を示すもの，下方へのみ変化を示すものがあり，症例により異なっており，今後，上下顎骨の成長変化様相を注意深く観察していく必要があると思われる。

9. 歯内療法を施した乳歯の臨床的観察

千葉桂子，千葉秀樹，真柳秀昭
神山紀久男（小児歯科）

抜髄及至は感染根管治療を行い Vitapex を根管充填した乳歯で，永久歯と交換した69歯（交換群），交換前に不快事項が発現し抜去した19歯（抜去群），計88歯について検討を加えた。

対象歯の根充時より交換あるいは抜去に至った経過年数は，最短8ヶ月から最長6年3ヶ月であった。

抜去群19例のうち根充時に存在していた問題が改善されずに残ったものが1例，その他はX線写真所見でも臨床所見でも一時的によい経過をたどったが，途中何らかの原因で再び不快事項が発現し抜去に至ったものである。不快事項の内訳は，修復物不良あるいは脱落による根管内汚染12例（前歯7例），膿瘍形成6例，その他1例であった。

抜去群の中でも膿瘍形成により抜去した歯と交換群の根管治療直前に撮影したX線写真をもとに，分岐部の暗影，根の吸収の有無について比較したところ，X線写真で根に1/3程度の吸収が認められ，しかも根分岐部全体に暗影が広がる症例の予後は好ましくない。

根尖あるいは根分岐部に病巣が存在し感染根管治療を行なった68歯中8歯の後継永久歯に形成不全がみられた。そのいずれもが感染根管治療時の後継永久歯胚の形成状態が，骨包の出現から歯冠1/3完成程度の範囲のものであった。

交換群で後継永久歯萌出年齢を歯髄処置の施されていない同名対側歯と比較したところ，乳歯が根充歯であっても後継永久歯の萌出開始時期にはあまり影響を与えていなかった。また，交換群と抜去群との比較では，萌出時期に大きな差は認められなかった。

10. 下顎第一小臼歯の小窩裂溝についてレプリカ法による形態研究

高橋紀子，島田義弘（予防歯科）

9歳から12歳の19名（男5名，女14名）から歯列の矯正治療上の理由で抜去され，かつ，肉眼的に齲蝕や形成不全を認めなかった下顎第一小臼歯20歯（右側8歯，左側12歯）を収集し，Galil・他（1975）が採用したレプリカ法を用い，齲蝕の好発部位である咬合面小窩裂溝の立体的形態について検討したので，その成績を報告した。まず抜去歯の歯冠部を10% NaOCl溶液に浸し，約10分間超音波洗浄することによって小窩裂溝内容物の除去を行ない，続いて水洗，アルコール